

戦後日本の米兵と日本人売春婦 —もうひとつのグローバリゼーション—

田中雅一

京都大学

1 はじめに

グローバリゼーションとは、人間、もの、情報などが急激かつ大規模に移動する現象を意味する。この移動はかならずしも一方向的である必要はない。それは、欧米や日本からそれ以外の地域への一方的な流れを意味するわけではなく、相互交渉的である。「西欧」は相互交渉を通じて非西欧社会において「地域化（ローカライズ）」する。非西欧はかならずしもグローバリゼーションの受動的な犠牲者とは言えない¹。

相互交渉の領域はさまざまだが、ここではとくに人間の動きに注目する。そのなかでも外国（西欧）人男性と非西欧人女性との性的関係を取りあげる。ここで二つの点についてことわっておく必要がある。まず、本稿では、主として敗戦直後のアメリカ兵と日本人女性との関係を考察するということである。したがって、本稿では、現在進行形のグローバリゼーション現象というより、日本人にとってそうした現象の原点になる敗戦直後の「アメリカ（兵）」についての体験を取りあげる。もうひとつは、本稿が目指すのは、実際にアメリカ兵と日本人女性とがどのような関係を持ったのか、ということよりも、それが日本人男性にどのようにとらえられていたのか、ということについて考察するという点である。つまり、本稿は戦後日本の原点である敗戦体験についての言説を考察対象とするということである。

さて、本稿ではルポルタージュを取りあげると述べたが、これらのルポルタージュはたんに「事実」を伝えようとしただけではないことを強調しておきたい。そこには、書き手である男性知識人の立場が露骨に現れているからである。

2 基地の街の女性たち

昭和20年（1945年）8月15日、日本の敗戦が決まった直後に、米兵を中心とする連合軍を受け入れるための準備が始った。政府主導のもとで進駐軍相手の売春施設（RAA、リクリエーション・アンド・アミューズメント・アソシエーション）が各地に設置され、若い女性を募集したことはよく知られている事実である。ただし、この「公娼制度」は短命に終わり、代わって街娼などの売春形態が基地周辺の街で黙認される。

以下では、西田稔の『基地の女——特殊女性の実態』（河出書房、昭和28年）を取りあげる。これは総頁が251頁、20章からなる書物である。西田は、戦前から児童教育に関わってきたが、戦後立川に住み、米兵による基地の町に住む子供たちへの影響や、米兵と日本人女性の間にできた子供たちの問題に関心を寄せ、米兵相手の女性たちの実態に注目した。米兵と関係を持つことで生活の糧を求めた女性は、立川には昭和25年から27年前期までの最盛期において5000名いたと言われている。

1 グローバリゼーションについて議論を詳述することはできないが、江湊一公、2000『文化人類学 伝統と現代』（放送大学教育振興会）を参照。

本書は、結論から言うと、きわめて良質なエスノグラフィーである。歴史的かつ広範囲の数量的な資料とともに、具体的な事例も多く含まれていて、基地周辺の女性と米兵との関係、女性の生活実態に鋭く迫っているからである。とくに、米兵相手に売春をする女性たちの生々しい事例は、同年、同出版社から発表され、たぶんもっと有名な神崎清の『夜の基地』にはほとんどない視点である。しかし、女性たちを特定の形容によって規格化しようとする傾向が強いのも事実である。この点を考慮しながらテキストを吟味していきたい。

西田は、本書の冒頭で調査を開始した当初（昭和22年末）は、「パンパン」と呼ばれる夜の女性たち、すなわち「特殊女性」と米兵が繰り広げる痴態から一般市民、とくに児童を守りたいという気持ちが強かったと述べている。しかし、それから5年以上経った今（昭和28年）では、女性を排除するだけではなく、女性もまた「汚濁の闇」から救出し、更正させなければならない、と決意している。

まず評価すべき箇所をいくつか挙げたい。ひとつは、調査から執筆までの期間におよそ2000人の女性にインタビューをしている事実である。そのなかには、全員ではないが、質問表によるアンケートも含まれている。

本書では立川という街が戦後どのような経済状況に置かれていたのかがきわめて明晰に説明されている。基地の存在、そこから流れ出る軍事物資などの闇物資、それを米兵から購入する闇商人、「第三国人」と一部の女性たちの関係がまず詳述されている。そして、立川を基地に依存している植民地的な都市と形容している。その上で、女性たちを一括りにしないで、7つのタイプに分けている。それらは、街娼、自称オンリー²、オンリー、恋愛関係というより金目当てのオンリー、人妻、一般家庭の娘、ほかの街からの通勤女性である。また、女性たちの、売春を始めた動機、組織や売春制度についても具体的に論じている。さらに、世代（酌婦と不良少女）やタイプの相違（街娼とオンリー）に由来する女性たちの対立などにも触れていてきわめて動態的な記述にあふれている。

著者の西田は「先生」として登場し、著者と女性たちとの交流が手に取るようにわかる。その交わりはきわめて感動的で、立川という街に住み、女性たちを親身になって世話していたことがよくわかる。

しかし、『基地の女』には、西田による一方的な決めつけと思われる記述が散見されるのも事実である。西田は最初の章「女たちに彩られた街」で、「特殊女性」を一般の女性、とくに主婦と対照させて記述している。

こころみに黄昏を待って街を歩いてみるといい。買物籠をつけたスマートな自転車に乗った女たちが、肉屋で上等の肉を買い、果物店でバナナを買っている。魚屋の店先に立っている女たちは、一般の主婦たちのように、財布の中のもの金と相談して買う魚を決めなどはしない（11頁）。

主婦だけではない。特殊女性は「日本人」とも対比されている。

この街の夜の道は、夜の女たちが得意顔で道の中央を歩き、お人好しの日本人や、英語の話せない日本人が両側をこそこそと歩いている（12-13頁）。

米兵を相手にする女性たちは、二重の意味で特殊である。それは性を売するという行為において、結婚制度（主婦）から逸脱している。つぎに、売春あるいは恋愛の相手が日本人ではなく米兵であるという点で「日本人」から逸脱している。ほかにも西田は、

2 街娼と異なりオンリーとは特定の米兵と関係が続ける女性を意味する。

女性たちの薄情さ（「他人の不幸には一片の同情も示さない」（57頁））や拝金主義（「人生はすべて金である——という生き方をしていたが、こつこつ金を貯えて喜ぶ人種ではなくて、なんの思案もせずに金が使えることに無上の喜びを感じる人種である」（55頁））を指摘している。しかし、ここで注目したいのは、最初の章の最後でつぎのように述べていることである。

植民地的歓楽都市立川——この町では何処を歩いても女たちの姿が見られる。そして街を汚した責任は女たちにのみ負わされている。侮蔑の目が女たちに注がれる。なにが女たちを駐留兵に寄生して生きて行かなければならなくさせたのであろうか、ということあまり考えられていないようである。むしろ一般の日本女性とは別種の人間とさえ見られて、手に負えぬ女性群は社会からほうり出された形である（15-16頁）。

つまり、西田は特殊女性の「特殊」性の発生の過程、差異化の過程を探る必要を強調している。そして、その過程を社会的な文脈で理解しようとしている。こうした視点から西田は、女性たちが強姦や詐欺にあっても、売春婦ゆえにそれを訴えることができないと、あきらめてしまうことなどを具体的な事例をあげている。そして、本書の末尾でつぎのような問いかけをする。

国がどれほど落ちぶれて、男性の凶悪犯人が続出して特殊男性の名称は生まれえない。肉体を売ると買うとのちがいで彼女たちには、特殊女性という名称がつくられてしまっている。あたりまえだと笑われれば、それまでであるが、同じ人間に生まれながら男性と女性との立場の相異は、人間の世界に不思議なものの見方を作ってしまったものである——。（1952年2月28日夜記す）（189頁）

西田は、当時広範に使われていたであろう「特殊女性」という概念について、いまならジェンダーの視点からと言って良いような批判を男性（米兵）や日本社会に対して加えている。残念ながら、西田の問いはそれ以上深く論じるところまでは至っていない。しかし、当時、「特殊女性」という言葉で米兵相手の女性を、いわば内なる他者として理解されてきたことを考えれば、西田の問いは当時の日本社会への根源的な批判ではなかったか。

『基地の女』の価値は、このような問いかけをすることで、われわれに自己と他者との境界の曖昧さ、そしてその線引きに作用するジェンダーをめぐる権力関係にすべく迫っている。しかしながら、性についてのルポルタージュがつねにこのような問いを発するわけではない。

『基地の女』が公刊されたのと同じ年の『婦人朝日』（1953年9月号）で「基地の紅い灯を消そう」という特集がなされている。その中で「夜の女をどうするか？——風紀対策の問題点と解決への方向」という座談会の記録が掲載され、そこで、西田はつぎのように述べている。

特殊婦人を更正させるといっても例えば三年か四年、外人を相手にすると、日本人と結婚できなくなるんですね。セックスの問題も不満だし、日本人は見るのもいや、体臭がいやだというんです。黒人を相手にしていた人はまだいいんですけども、白人を相手にしていた人はダメですね。身体が変わっちゃうんです。ですから、更正寮へ入れても、朝起きてタバコ一本すえないのが苦しいといって逃出したり、袋貼りの作業をさせると、それに印刷してある性

的な記事を見付け出して取っおいたり、禁慾生活に堪えられないらしいんです。いくら監視しても、うまくいきませんね。

ここで西田は、性的な経験が女性たちに多大な影響を与えていると指摘している。「身体が変わっちゃう」という言葉に西田の悲観的な意見が凝縮している。それは、女性に対する一般的な見方を助長するような視点と言えよう。女性たちは男との関係を通じて、もはや帰ることが不可能な世界へと入り込んでしまった。とくに白人男性と関係を持つと女性は性的に変化してしまうというわけだ。一旦変わってしまった女性たちを救うことは不可能だ、ということになる。この座談会での発言は、『基地の女』においてもときに認められる、売春婦たちの否定的なイメージをそのまま受け継いでいるように思われる。

私が注目したいのは、西田の著書には、売春婦への両極的な感情が認められるということである。西田は一方で彼女たちに更正の可能性を認め、またその背後にある権力関係——男性と女性、戦勝国と敗戦国など——への批判的視点をもち、他方で彼女たちを固定的かつ悲観的にとらえている。そこには、敗戦直後の知識人男性のジレンマが透けてみえる。西田は、先生として「特殊女性」たちと個別に接し、その特殊性がけっして特殊ではないことに気づく。それゆえ、更正という目的も意義あるものなのだ。かれは、更生者（＝啓蒙者あるいは救済者）としてみずからを位置づけ、知識人男性としての立場を確保することができた。しかし、他方で、彼女たちが米兵と関係を持ち、そこから抜け出ることができないと語っている。それは、決めつけともあきらめとも解釈できるかもしれないが、そのあきらめは敗戦国の男性に特有の諦観に通じるように思われる。敗戦国の女性は、一部の女性をまもるためという名目と生活上の必然性から売春婦となり、男性たちはおしなべて「女性化」した。徹底抗戦を信条とする者はもはやなく、米軍による「解放」を楽天的に受け入れるわけにもいかない男性の視点が西田のあきらめに認められよう。以下に見るような、女性を批判したり、また米兵を批判することで満足できる著者たちは、ある意味で幸せなのだ、とも言えよう。

3 黄色い便器

つぎに、『夜の基地』を著した神崎清の「黄色い便器——米軍の排泄都市タチカワ」（『真相』1954年復刊3号）という記事を検討したい。それはつぎのような文章ではじまっている。

いまアメリカの兵隊のあいだで、『黄色い便器』（イエロー・ストゥール）という奇妙な言葉がはやっている。米語辞典の最新版にはまだのっていないがパンパンの異名である。……女の方では爪をあかくそめたり、安物のイヤリングをつけたりして、淑女のつもりでいるのだろうが、兵隊仲間では、『足の短い便器をひきずってあるく』といっておもしろがっている。ああ、ハイヒールをはいた便器！チュウインガムをかむ黄色い便器！腰をふってジルバをおどっている足のみじかい便器！アメリカの兵隊にとって、日本の女は、生理的必要をみたすためのたんなる道具にすぎない。

この記事は、米兵を相手にする女性たちのさまざまな形態の紹介である。神崎は、これを大きく6つに分けている。最初の4つは、キャバレー、バー、置屋、ハウスなど、女性たちのいる場所による分類である。キャバレーを除く場所で働く女性たちは売春婦として紹介されていて、さらにオンリーと契約愛人を加えている。神崎にとってオンリーもまた「黄色い便器」の変異でしかない。

しかし、アメリカの兵隊のすべてが、商売女と浮気していると思ひこむほど、こっけいなことはない。誰が排泄したかも知れぬ不潔な『共同の便器』をきらう兵隊はいわゆるオンリーをかこって、『専用の便器』を用意するのである。

神崎の意図がどうであれ、「国際売春都市タチカワ」あるいは「ハイセツ都市」で働く女性たちは、「黄色い便器」、「足のみじかい便器」、「共同の便器」、「専用の便器」と形容され、他方米兵はキャバレーなどの「排泄機関、すなわち売春施設」で働く女性相手に「タチカワで排泄」する存在である。こうした記述で強調しておきたいのは、売春婦を便器とし、売春婦相手の性交を排泄とする図式がたとえ神崎自身の考えではないとしても、読者は、こうした図式に反発するというより、受け入れ、類似の言葉で女性たちを形容してしまう、という遂行的（パフォーマティヴ）な役割を本記事が果たしているということである。これらの表現は、すでに流布している表現をそのまま使用しているだけだとしても、それ自体力をもって、われわれに女性についての一方的な見方を押しつけている、ということを忘れるべきではない。読者は、そのような表現を賛意を示すかどうかは別にして、女性たちを「黄色い便器」とみなし、接することになろう。

先に述べたように、神崎には『夜の基地』という、基地の街の売春や闇市の実態を暴いたルポルタージュがあるが、そこでも女性たちへの視点というのはことのほか薄い。

それでは、当の女性たちの声はどうだったのか。彼女たちの考えや意見はまったく無視されたのだろうか。われわれは、つぎに女性たちの手記について吟味したい。

4 女性たちの手記——『日本の貞操』

つぎに紹介したいのは、『日本の貞操——外国兵に犯された女性たちの手記』と『続日本の貞操』という書物である。両者はともに一九五三年に公開された書物でベストセラーになる。前者は4名の女性たちの独白からなり、当時通訳をしていた水野浩が編集している。後者は、後に『ノストラダムスの大予言』（1973年）を著した五島勉の編集で、1985年に『黒い春——米軍・パンパン・女たちの戦後』と改題されて出版されている。こちらは女性たちの証言とその背景の説明からなるルポルタージュである。

両者に共通するのは、米兵による性暴力に対する怒りである。水野編『日本の貞操』の冒頭で紹介されている小野年子、23歳の手記は、本書のおよそ半分を占めている。以下、簡単に紹介しよう。

年子は、京都で米兵たちにだまされて外に連れ出され、輪姦される。東京でダンサーになるが、ダンスホールでも暴行を受け、売春をはじめる。一時オンリーになり、裕福な暮らしも経験し、自分の愛人とその仲間たちが素人の女性を騙して輪姦するというゲーム（狩り、ハンティング）を手伝いさえする。あるとき、闇市に買い出しに来ていた女性を最寄りの駅まで送っていこうとジープに乗せ、仲間の一人の家に連れこむ。女性は年子がジープに乗っていたので安心して乗りこむ。

待ちかねていたヘイズとミラーは、獲物のすばらしさに声をあげて喜んだ。こわさに口もきけない女の子をロジャースと3人がかりでうちに抱えこんだ。私はそれを当然のようにみていた。もし私がかつて強姦された当時の苦しみを少しでもおもいかえたなら、こんな手助けはできるはずがなかったのだ。それなのに私はそのうえ直接、手伝いさえしてしまった。・・・さすがの私も私のあさましさを、首をふって忘れようとした。私はそれほど盲目のけだものになっていたのだ。だからこそ私はこのように一切切を告白する。ロジャースは、（女性に）頬ずりし、それから体をずらした。ハンティングで、こんなに

私まで興奮した気分にあきこまれていったのは初めてだった。ビールでのどをしめすのも忘れて、皆息をつめて、見守っていた[86-87頁]。

ロジャースは小野年子の愛人である。自分の愛人が女性を犯すところを見ながら年子も興奮している。しかし、このハンティングは年子のその後の人生を大きく変えてしまう。女性は別れ際にキスをしようとしたロジャースの舌を噛みきって殺し、自分の舌も噛んで自殺してしまうからだ。年子はロジャースとそれまで住んでいた家を追い出され、再び街娼となった。そして、梅毒や癌に体を蝕まれていく。彼女の手記には、米兵への憎しみ——かれらによる強姦さえなければ売春などしていなかった——と、彼女自身の一種のあきらめや弱さ、そして、ときに米兵といることの喜びが混在している。

小野年子の手記にはさまざまなエピソードが語られている。友人の米兵が飼っていた猿欲しさに、自分の女性（オンリー）をかれに引き渡す米兵。もちろん当の女性は猿と交換に捨てられたとはつゆ知らず、男が来るたびに形だけの抵抗をするが、結局は抱かれてしまう。

この米兵は、街で拾ってきた靴磨きの少年を基地で雇っているが、かれの楽しみのひとつは猿に追い回させることである。あるとき少年が猿に刃向かうと、米兵は怒ってかれを追いついてしまう。しかし、少年は出ていくと見せかけてオフィスに戻ってきてこの猿を撲殺する。これを知った米兵が少年を殺そうと追いかけるが、少年は逃げる途中で自動車にひかれて死んでしまう。

年子はまた、街娼やオンリーだけが性的対象ではなく、基地で働いている女性は犯すために存在すると思われるのと指摘する。そんな女性がほかの米兵にやられる前にやる、というのが米兵たちの論理だというのである。

ときに、年子はなわばりを荒らす女性をリンチするが、年子自身も銀座に買い物に出て、リンチを受ける。さらに衝撃的なのは、米兵の飼っていた犬に年子が犯され、それが米兵たちの見せ物になる、というエピソードが紹介されていることである。

私は情けなかった。が、それまでいいだしたら人のことなんか、平気で無視するG・I・相手では、されるままになる以外にない。私はかたく目をつむってこらえた。私はただ、涙の落ちるのを一心にこらえていたことをおぼえている(132頁)。

ショーは何度か行われた。ある日年子は、この犬を連れだし、殺してしまう。

私は、惨めな自分の生涯の、このもっともくやしい経験を、すっかり泥を吐くように吐きだした。何のために——しかしわたしはいくぶんでも私を通じてG・I・たちの真の姿をつたえたと思う。彼らのみにくい動物性を示したはずで(137頁)。

年子だけではない。職場や自宅での強姦によって、運命を大きく変えざるをえなかった女性たちの証言が続く。朋江は、一家団欒の最中に米兵ふたりの侵入を受け、母と妹とともに強姦された。妹は惨殺されるが、警察はなにも動こうとしない。そして朋江の妊娠が分かる。

私は戦争が終り、平和が回復してから、二年もあとに、アメリカの自由の使徒たちから受けたきずを、口にすることさえ許されてはいない。また、口にすることもできない立場におかれている私達は、アメリカのいつはてるともしれない占領が私達におわせた深傷を胸に死ぬまでひめて、苦しみ、もだえながら、生きていくほかはないのだ(223頁)。

『続 日本の貞操』では女性たちの証言はより短いものになっているが、論調は同じようなものだ。平凡な、しかし幸せな日常、偶然、あるいは仕組まれた米兵たちとの邂逅、そこでの暴力による処女喪失、混乱とあきらめ、家族との葛藤、家出、売春というテーマがなんども繰り返される。彼女たちの手記を貫いているのは、現在の状況を招いた米兵への怒りや憎しみであり、また圧倒的な力に対する無力さとあきらめである。

以下4点について指摘しておきたい。

まず、女性たちは米兵に恨みをもち、自分たちの境遇を嘆いていたとはいっても、ときに彼女たちは女性同士の配慮に感謝し、また米兵とのデートに心を弾ませ、さらに朝鮮戦争で疲弊した若い兵士に同情する。そして、彼女たちだけでなく、米兵の人生をも踏みこじっていく大きな暴力の存在に不安になる。

つぎに、戦後の混乱期、日本人男性による強姦がなかったとは思えないし、日本人相手の売春婦もいただろう。そして、彼女たちも売春をはじめた理由は生活苦や処女喪失が契機だったかもしれない。しかし、こうした女性たちが語られることはなかった。彼女たちは「日本の貞操」を代表することはなかった。米兵の異人性が女性の「特殊性」を強めているといえる。そこには、後で触れる読書の性的好奇心に訴える要素が認められるともいえる。

第3に、こうした手記は、もちろん同情をもって読まれ、また米兵の犯罪を告発することに役立ただろう。本書で強調されているのは、女性たちの矯正・救済というより米兵たちの犯罪についての告発である。そこには、外からの記述ではうかがい知れない女性たちの心情が吐露されている。しかし、同時にこうした手記が性に関する露骨な読み物として消費され、後の、それほど深刻でもない、風俗嬢たちやアダルト・ビデオの女優たちの手記や語りの原型となっている、と考えることもできよう³。ここにはドラッグこそ出てこないが、ダンス・パーティーのあとの乱交、猥姦、サディズムや屍姦などの描写は、『限りなく透明に近いブルー』（村上龍 1976）を想起させる。

最後に興味深いのは、当時の文章が米兵の「人種」にほとんど言及していないということである。これは1958年に発表された松本清張の『黒地の絵』に描かれている黒人兵による脱走と暴行に見られる、黒人に対する「まなざし」とはかなり異なるように思われる。手記から強姦をしたのが白人兵だったか黒人兵だったかはほとんどの場合定かではない。「黒人の性化」がそれほど問題視されていないというのは、すでに引用した西田の「黒人を相手にしていた人はまだいいんですけども、白人を相手にしていた人はダメですね。身体が変わっちゃうんです」という言葉からも明らかである。そこでは、黒人よりも白人とのセックスがむしろ問題視されている。また、「体臭」についても日本人こそ体臭の強い存在として語られている。1980年代に黒人兵と交際する日本人女性の生態が大きく取りあげられることになるが、黒人の性的特質を強調するような風潮はかならずしも戦争直後から認められていたわけではないのである。

5 講和条約締結後

1952年のサンフランシスコ講和条約締結後、米軍の地上部隊の多くが撤退していく。それにともない日本各地にあった基地の数も減る。日本は連合軍による占領という状態をやっと脱し、主権を回復する。紹介した本や記事は、こうした状況の変化によって初めて米軍の犯罪について公に書かれることになったものと位置づけることができよう。それ以前に出版されたいわゆるカストリ雑誌にまったくと言っていいほど米兵は登

3 もちろん、戦前からの風俗に関するルポルタージュの伝統も考慮する必要があるだろう。

場しない。そして講和条約締結から5年後、1957年に売春防止法が制定される。

しかしながら、売春がこれによって全面的に禁止されたわけではないし、米軍基地は規模こそ年々縮小されているが、なお存続し、また米兵相手の日本人女性についてのスキャンダルは事欠かない。もちろん女性たちはもはや強姦の犠牲者でも、処女喪失で「墮落」した女性たちでもない。女性たちは、自分の意志で恋愛相手として、あるいはセックスでの快楽を求めて米兵とつきあい始めるからだ。そんな女性たちのなまなましい生態を描いた山田詠美の『ベッド・タイム・アイズ』が出版されたのは1985年である。彼女たちは、「ぶらさがり族」とか「ブラパン」と呼ばれる。前者は背の高い黒人と手を組んであるくとぶら下がっているように見えるからで、後者はブラックあるいはブラザーのブラとパンパンの合成語である。この名称は彼女たちがみずから使い始めたと言われている。彼女たちにとってパンパンはもはや蔑称ではないとも言える。その変化に戦後のジェンダーの変化を認めることが可能であろう。

さらに、占領時代には信じられなかったことだが、基地に住むアメリカ人の女性たち（女性兵士や妻）が高い円欲しさに、日本人相手に売春をするということさえ起こるのである。

6 おわりに

最後に、グローバリゼーションとの関係で、本書で取りあげたような書物がどのような役割を果たしたのかを考えてみたい。

米兵と売春婦たちとの痴態を読むことで、日本人の男性読者たちは、みずからの「正常性」を確認したであろう。いや、かれらだけではない。男性読者は、自分たちの女性——妻、姉妹、母、娘など——もまた正常であることを確認する。売春婦と異なり、まだ彼女たちは汚されていない。そもそも講和条約締結後、多くの米兵が帰国し、米兵の危険はすでに峠を越していたはずである。彼女たちは、汚されずにすんだ、墮落せずにすんだ女性なのだ。生身の売春婦だけではない。彼女たちの物語もまた、外国人男性の圧倒的な力——敗戦国の人間への有無をいわせぬ支配、攻撃、排除、陵辱など——にたいする精神的な緩衝地帯として作用していたのである。それはまた、日本人男性による米兵の強力な男性性の馴化の試みだったと言えよう。そのためには、同じ日本人でありながら「他者性」を帯びた売春婦を必要とした。

しかし、売春婦は完全な他者にはなれない。彼女たちはまさにみずからの物語を通じて語り始めるからだ。そして、その語りの中には日本社会の伝統的なジェンダー規範を批判し、米兵がもたらしたあたらしい男女関係を肯定的に捉える者もいた。米兵とつきあっていた女たちが皆みずからの意志に反して処女を失い、日本社会で生きていけなくなった存在ではない。またすべてが売春婦であったのではない。現代から見ればけっして不自然ではない形の交際期間を経て、結婚し海を渡った女性もいるからだ。いわゆる戦争花嫁をすべて「貧困のため」と説明するべきではないだろう。「ドイツ兵に勝利するためにわれわれは5年かかったが、ドイツ女性を陥落するのに5分しかかからなかった。」という言葉があるように、女性が勝戦国の男性に惹かれるのは不思議なことではなかった。それは、敗戦国の男性には露骨な非難であり、屈辱であった。

太平洋アジア戦争敗戦後の占領期は、明治の開国について日本の近代を決定する大きな政変であった。そして、米兵を中心とする連合軍の占領こそが現代に続くグローバリゼーションの起点であった。この場合、占領は、圧倒的な軍事力を背景とし、政治的かつ経済的に優勢な勢力による支配であり、新憲法の発布、教育制度や既存の政治・経済

制度の改革、民主主義理念やジャズなどのアメリカ民衆文化の導入などの変化がもたらされた。本稿で考察の対象となった男女関係においても、占領軍の兵士たちが「買う」能動的な存在であったのは明らかである。恋愛関係においても事情は同じであったろう。よほどのことがないかぎり、日本人女性の側から米兵に声をかけたり、近づいたりするということはなかったはずだ。

統計上、国際結婚における男女比が逆転するのは1957年のことだ⁴。それまでは、日本人女性が外国人男性、とくに欧米出身の男性と結婚する数が、日本人男性が外国人女性と結婚する数を上回っていた。また、在日米軍との関係でいうと、それよりすこし早い1971年には円高などの影響から、基地で働く女性や米兵の妻たちが日本人相手に売春を行うという記事が現れる。日本は、1970年代において経済戦争に勝利し、それにともない男女関係でも「勝者」になったということになろう。また、1980年代になると、恋愛相手に米兵、とくに黒人兵を対象とする日本人女性がマスコミを騒がす。食事代やホテル代を支払うのは彼女たちだ。「恋愛」においても事情は大きく変わったといえよう。しかし、これらはあくまでマクロな状況において、ということである。ミクロな次元では、たとえ一方的な力関係が認められるとしても、個々の男女の出会いにおいて、またそうした出会いを「書く」という行為において、「一方向的なグローバリゼーション」と断じることはできない複雑で交錯した力関係を認めることができるからだ。

占領期の日本における米兵と日本人女性についてのルポルタージュを取りあげることで、グローバリゼーションをたんに政治経済の問題あるいはマクロな次元の問題に限定すべきではないし、またこれを一方的な動きとしてとらえるべきではないということが明らかになったはずである。

4 国際結婚については、石坂晴海 2002、『オンリー・ラブ 進化する結婚 彼女たちはなぜ非欧米系外国人を選んだのか』（現代書林）、竹下修子 2000、『国際結婚の社会学』（学文社）を参照。